



研究調査報告

『ヨーロッパ近代生活絵引』 編纂共同研究

ミュンヘンとウィーン—18世紀ヨーロッパにおける二つの首都の肖像—

ステファン・ブッヘンベルゲル
(非文字資料研究センター 研究員)

2013年8月6日～8月22日まで『ヨーロッパ近代生活絵引』班の調査でミュンヘンとウィーン、2つの都市を訪問した。

ミュンヘン

18世紀には選帝侯の居城都市であったミュンヘンは、1806年、ナポレオンの恩恵によりバイエルン王国の首都となった。このことにも原因があるのかもしれないが、18世紀のひとつの生活を調べるのできる、ミュンヘン市を描いた画像資料は比較的乏しいのである。18世紀はまだ、絵画の眼目はなによりも宗教画にあつたのだ。これは、バンベルクやレーゲンスブルクなど、他のバイエルンの都市にも当てはまる。そのようなミュンヘン都市図は、ミュンヘン市博物館には6つしかない上、その6つにおいても、人間にはずっと下の役割しか与えられていない。所蔵のうち、ミュンヘン市の肖像とも言うべき絵画の主なもの、19世紀に由来するのである。

とはいえ、当時の傑出した街景図画家、ベルナルド・ペロット (1720-1780年)、またの名カナレットは、ミュンヘンに滞在していた1761年に、ミュンヘン市の景色を3つ、ニュンフェンブルク城の様子を2つ、イーザル



図1 ハイットハイゼンから望んだミュンヘン (ベルナルド・ペロット、1762 - 67年頃)
出典 Wikimedia Commons (著作権の制約が無いデータベース)



図2 ミュンヘン・マリア広場の市場 (ミヒャエル・ヴェーニング、1701年頃)
出典 Wikimedia Commons

川の右岸から市を観たパノラマを1つ、絵にしている。ハイトハウゼンは当時はまだ小村であったが、百万もの居住者を抱えるミュンヘン市の一部となって以来、すでに久しい。

ミヒャエル・ヴェーニング (1645-1718年) の銅版画は、ミュンヘン市の生活のありさまを詳細に見せてくれる。彼は4巻にわたる主著『バイエルンの歴史と地誌』(1710-1726年)で、ミュンヘンの4つの財務庁や、城や僧院などの建物も含めたブルクハウゼン、ランズフート、シュトラウビングなどの地のありさまを、およ



図3 マリア広場のマリア柱 (2011年)
出典 Wikimedia Commons

そ千もの銅版面に録したのみならず、街景図や戦闘図をも版面に刻した。ミュンヘン市自体の景色はそのうちの25にのぼる。

彼の名高い版画「ミュンヘン・マリア広場の市場」に彫られた街景のうち今日に遺っているのは、マリア柱と背景の聖母教会を除けばほとんど無い。第二次世界大戦が市を破壊し、19世紀に新市庁舎が建てられたからである。マリア広場自体は1972年以来、歩行者天国となっている。

ウィーン

同じ時代のウィーン市の肖像は比較にならないほど多い。ハプスブルク帝国の首都として、18世紀のウィーンはミュンヘンよりもはるかに重要であり、人口も多く、文明も進んでいたからである。ウィーン博物館、美術史博物館、造形アカデミーの絵画ギャラリー・銅版画コレクションには、絵画や銅版画が多く収蔵されている。特筆すべきは、ミュンヘンに旅する前の1759年から1861年の間にペロットが描いた13の街景画である。

ウィーンが都市として遂げた発展のありさまをとりわけよく伝えているのは、「居城都市ウィーン」に取めら

れた、カール・シュッツ、ヨーハン・ツィーグラ、ラウレンツ・ヤンシャの57の手彩色銅版画(1779-1798年)である。これらの銅版画は、当時大いに人気を博した。

ウィーン王宮が近いことから、炭市場通りには18世紀から、砂糖菓子屋のデメルなどさまざまな御用達の店が移り住んだ。今日の炭市場通りは、国際的なブティックや宝石店が並ぶ、贅沢な買い物街である。



図6 フライウングのショッテン広場(ヨーハン・アーダム・デルゼンバッハ、1740年)
出典 Wikimedia Commons



図4 ウィーンの炭市場通り(カール・シュッツ、1786年)
出典 Wikimedia Commons



図7 ダヌベ川から見たアルタン・ブトン宮殿(ヨーゼフ・エマヌエル・フィッシャー、1720年)
出典 Wikimedia Commons



図5 炭市場通り(2012年)
出典 Wikimedia Commons

バロック時代のウィーンの様子は、言うまでもなく、もっと早くから銅版面に録されていた。例えばヨーゼフ・エマヌエル・フィッシャー、ヨーハン・アーダム・デルゼンバッハの手による1719年の諸作品においては、当時の貴族文化が前面に出ている。これら2種類のコレクションにより、成熟した貴族社会からますます都市性を増してゆく社会へとウィーンが変遷するさまが、良く辿れるのである。